# 十二月

井上大和

# 一

山頂に辿り着いたのは、午後七時を少し回った頃だった。僕は跨っていたバイクのエンジンを止め、スタンドを立てると、ポケットから煙草を取り出し、展望台に向かって歩き出した。秋になろうというのに、じっとりと湿った空気が体中にまとわりつく。歩きながら煙草を咥える。特に何を展望してやろうという気は無かったのだけど、来てしまったものは仕方ない。鍵やら何やらで騒々しいポケットの中から、ライターを見つけ、煙草に火をつける。きっと綺麗な夜景が目の前に広がるのだろうと一瞬は思ったが、よくよく考えたら今日は曇りである。僕は深く息を吸い込む。予想通り、展望台から見える風景は、闇そのものであった。僕は肺に溜まった煙混じりの空気を吐き捨てる。つまらねえなあ、と僕は呟えていた煙草を指先でつまみ、ぴんとその闇に向かってはじいた。赤い軌跡が、くるくると回りながら闇の中に消えていった。僕はそれを見届けた後、振り返り、バイクの前までやってきた。てくてくてく、と暗闇に響いていた足音が無くなる。バイクの上には、丸が浮かんでいる。遠い照明が作る薄い陰影の中で、その丸だけが異様に幾何学的な形をしていたので、妙に薄気味悪かった。丸の中には、バイクの絵が描いてあって、その後ろに一本、太い斜めの線が引いてある。そして丸の下には、これまた幾何学的な、横長の長方形があって、中には『19-8』と書いてあるのだ。僕が腕時計に目をやったところ、時計の針は明らかに午後七時半頃を指していたので、つまり、僕は、帰れなくなってしまったという事になる。これはどうしたものか。さて、今僕の手には大きく分けて二つの選択肢がある。一、無視して帰る。二、朝まで時間を潰す。おおよその賢明な人間ならば、前者を選ぶであろう。朝までこのような所でどうやって時間を潰すというのだ、と言うに違いない。しかし僕には、後者を選ぶのに十分なだけの、幾つかの理由があった。

まず、この標識である。この標識は、具体的には、「午後七時から、午前八時までは、自動二輪と原付はこの道路を通行してはいけませんよ」と言っているのである。これを無視すると、どうなるだろうか。ここで前提条件

を確認しておこう。この山には、夜中になると数多くの車がやってきて、その大半は速度超過をしている。そして、それを取り締まるために、頻繁に覆面パトカーが出没する。そこを、二輪車に乗った僕が、風を切って走っていくのである。どうなるかは言うまでもなかろう。第二の理由、これが一番厄介なのだが、僕の記憶が確かならば、現在僕が持っている交通違反の点数は、四点である。そして、僕が気持ちよく風を切って下山しているところを、警察官に見られてしまった場合、もれなく二点がもらえるのだ。さらに、六点以上を集めた人には、シールをハガキに貼って送るなどという面倒な事をしなくても、もれなく免許停止という行政処分が下される。結局の所、何が言いたいのかというと、つまり、免停が怖いので帰るに帰れないのだ。身も蓋もない言い方である。僕はトボトボと展望台に戻り、そこには闇しか無かったのだが、その深い闇を見つめた。ポケットから再び煙草とライターを取り出し、もはやこの動作は習慣となってしまっているため、特に意識もせずに、火をつけた。深く息を吸い込み、吐き出す。真っ暗な展望台では、吐いた息の白さが分からない。僕は、現在に至るまでの出来事を思い出した。第三の、僕が帰れない最大の理由を。

（続く）